

## パキスタンの思い出

9・11事件、つまり、今から10年近く前になった2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルなどを破壊して多数の死傷者を出した同時多発テロ、この事件のマスターマインドだとされたオサマ・ビン・ラディン (Osama bin Laden) が5月1日に殺害された。その舞台となったのは、意外にもパキスタンの首都イスラマバードに近いアボタバード (Abbottabad) で、ビン・ラディンの隠れ家を深夜に奇襲したのはアメリカ海軍の特殊部隊 SEAL だ。これで、10年続いて来たアメリカと同盟国の対テロ作戦に区切りが付き、テロと対テロ作戦の応酬で不安定になってしまった世界が変わると良いと思う。

アボタバードはイスラマバード近郊と伝えられているが、実際にはイスラマバードから約50 km北にある相当大的な町のようにだ。Abbottabadは、英国がこの地域を支配していた1853年にこの町を建設したJames Abbott 英国陸軍少佐の名前に因むものだ。これはちょっと意外な感じを受けることだ。Abbottが、この地を英軍の拠点にしたのは、ここが海拔1,260メートルの比較的気候の良いところだからだ。現在、ここにパキスタン軍の施設が多いのは、英軍の施設を引き継いだからだろう。実は、私はこの町の近くまで行ったことがある。今から23年前の1988年9月のことだ。今回の事件で、テレビニュースに出るアボタバードの景色を見て、23年前のことを思い出した。

1988年9月11日から4日間、私はパキスタンに滞在した。ロンドンから帰国の途中だった。何故この旅行をすることになったかを話すと長くなるので、それは省略する。イスラマバードの空港に着いたのは9月11日の朝だった。その少し前に、乗っていた英国航空BAの機長がMt. Everestが見えるという放送をした。確かに、白くて高い山が見えたが、いくら飛行機から見ているとはいえ、遥かに東にあるエヴェレストが見えるはずはないと思った。後で調べたところ、この山はナンガ・パルバット (Nanga Parbat) だということがわかった。ナンガ・パルバットはイスラマバードの北東約200 kmにあり、標高8,126 mで、これは世界第9位だ。BAの機長もいい加減なことを言うものだ。

9月11日は日曜日だった。事前に連絡を交わしていたのは、パキスタン原子力委員会の研究所に勤務していたM. N. Qazi 博士で、この人は東大工学部田畑米穂教授(当時)の研究室に来ていたことのある人だ。日曜日なので、Qazi氏はどこかに案内すると言う。着いたばかりで私は疲れていたが、観光はこの日にしかできないので、出かけることにした。Qazi氏は、景色の良い北の方角、つまり今から思うとアボタバード方面を案内しようと思っていたようだったが、私は、西の方角にあるガンダーラ地方に行ってみたかったので、彼が運転する車でそちらに向かうことになった。もちろんガンダーラ地方は仏教遺跡の多いところだ。日本の仏

教は、ガンダーラ地方から遥々と伝わってきたものであることはよく知られている。

ガンダーラ (Gandhara) という地名は現在使われていないが、紀元前6世紀から11世紀までの長い間存在した王国の名前だ。その版図は時代によって大きく変わったようだが、現在のアフガニスタンに近いペシャーワル (Peshawal) が中心だったとされている。私が半日ほどで行くことができたのは、この広範な地域のほんの一部だけだ。それでも、興味深いものを見ることができた。前もってよく調べてから行っていれば、もっと良かっただろう。

イスラマバードから西に向かうのは良い道で、この道を進めば、ペシャーワルに行くことができ、更に進むと、アフガニスタンとの国境にあるカイバー峠 (Khyber Pass) に至るはずだ。往来する車は多く、バスやトラックには例外なく絵や字がけばけばしく描かれていた。他に、あらゆる種類の動物がいて、一番大きいのは駱駝だ。これは私には面白いドライブだった。

イスラマバードから西に35 kmほどのところにあるタキシラ (Taxila) という町まで行った。町に入るまでに3, 4箇所まで仏教遺跡を見た。照りつける日射しのなかで、多数の仏像が何の覆いもなく並んでいた。どれも石像だ。1, 500年から2, 000年を経ているはずだが、強い日射しのなかで、よく残っているものだと感心した。昔は仏教寺院の一部だったのだろうが、建物は全くなかった。見に来たのは私たち2人だけで、周囲に柵や壁はなかったと思う。しかし、どこからともなく番人が現れて、入場料 (拝観料か) を請求した。

タキシラには、よく知られている博物館があり、仏教関係の展示がある。仏像が多く、修業中の仏陀の像などもある。修業中の仏陀が痩せこけて、あばら骨が浮き出して見える座像で最も有名なものはラホール博物館にあるようだが、タキシラの博物館にも似たものがあった。原始仏教は偶像崇拝を禁止していたが、仏教がガンダーラ

に入ってきてから、仏像が作られるようになった。これは、アレキサンダー大王のインド亜大陸遠征と関係があるとされている。つまり、ギリシャの神々の像が仏教に影響を与えたのだ。高校世界史に出てくるアシヨーカ王 (マウリヤ朝、紀元前3世紀) やカニシカ王 (クシャーナ朝、2世紀) は仏教美術を興隆に導いたことで知られている。

帰途、Qazi氏はヒッチハイクをしていた若いイギリス人のカップルを乗せた。旧宗主国のイギリス人には、一目置いているような感じがした。そのカップルにどこに行ってきたのか尋ねたところ、クンジュラブ峠 (Khunjerab Pass) まで行って来たとのことだった。クンジュラブ峠はパキスタンと中国の国境にあり、標高4, 693 mで、舗装された道路で行ける世界最高位置の国境になっている。その道路は1978年に完成したカラコルム・ハイウェイ (Karakoram Highway) で、アボタバードの近くのHasan Abdelから中国新疆ウイグル自治区のカシュガル (Kashgar) まで約1, 300 kmにわたっている。クンジュラブ峠に行く途中には景色の良いところが多いそうだ。最近観光目的でここに行く日本人が多くなっているようで、撮影してきた写真をネットで公開している人が何人もいる。私もここには行ってみたいと思っていたが、残念ながらもう行くことはないだろう。

この日は、日が暮れてから、イスラマバード最大のモスクに行った。サウジアラビアのファイサル国王が寄贈したもので、新しく大きな建物だった。広い床には大理石が敷き詰められており、ピッカピカに磨かれていて塵ひとつなかった。礼拝の間ではなかったもので、がらんとしていたが、時間がくれば大勢の人々がここに跪いて、メッカに向かって礼拝するのだろう。偶像崇拝を禁じているので、内部の装飾は簡素だった。靴を脱いで上がったように思うが、その靴をどうしたかは憶えていない。

この夜はHoliday Innに泊まり、翌12日にイスラマバード大学で講演をしてから、

Qazi 氏の勤務先のパキスタン原子核科学技術研究所 (Pakistan Institute of Nuclear Science and Technology) を見学した。とくに印象に残ることはなかったが、大学の建物の中にも礼拝室があることが私には珍しかった。何もなく、ただガランとした清潔な部屋があるというのは、奇妙な感じだ。ここで教授たちも礼拝するのかなと思ったが、そうではないらしかった。なお、イスラマバード大学の英語での正式名称は Quaid-i-Azam University だ。Quaid-i-Azam の意味は憶えていない。

翌 13 日、約 250km 南のファイサラバード (Faisalabad) にパキスタン航空の国内便で移動した。ここは、かつてリアルプール (Lyallpur) という名前だったところで、サウジアラビアのファイサル国王がパキスタンに対して行った援助に感謝するため、町の名称を「ファイサルの町」に変えたとのことだった。人口は多く、町の中は人と動物で溢れているという感じのところだった。その夜は、中華料理店で夕食を食べたが、美味しかった。中華料理店は世界中どこにでもあるというが、本当だと思った。その夜は、翌日訪問する予定の農学・生物学のための原子核研究所 (Nuclear Institute for Agriculture & Biology) のゲストハウスに泊まった。部屋の冷房が効いていたので助かったが、翌朝洗面所に大きなやもりが居たのには驚いた。蛇でなくて良かったと思った。

翌 14 日には、上記の研究所で講演をした。ここでは、放射線による植物の改良の研究をしており、その目的は綿花栽培の効率を上げることだった。これは当時でも旧式になりかけていた研究だが、今では全く変わっているだろう。おそろしく暑いところだった。研究所構内で、‘たわわに’実が付いている綿の木の畑を見たが、気温は多分 50℃ ぐらいだったろう。強烈な日射しで頭がクラクラした。こういう土地で生活するのは大変だろうと思った。

その日は夜になってから、パキスタン航空の国内便でカラチに飛んだ。カラチまでは 800 km 以上あるが、下に燈火はほとんどなく暗かった。カラチ空港ではヨーロッパから飛んでくる日航機に乗るため、真夜中に空港内の地面を歩いて移動した。そのときポーターが旅行鞆を運ばせてくれと言うので、運んでもらったが、ホイールが付いているのに、自分の肩に担いで運んだ。ある意味で律義なところがあると思った。当時、パキスタンの国内はいろいろな面で比較的きちんとしており、2 度乗ったパキスタン航空の国内便はどちらも予定どおり運航した。

「パキスタン」とは、ウルドゥ語 (パキスタンの公用語) で ‘清浄な国’ という意味だそう。今のパキスタンは、いろいろな意味で大変なところだが、早くその名のとおりのところになってくれれば良いと思う。素晴らしい景観と豊富な文化遺産があるのだから、不安なく旅行ができるようになれば、観光が国の主要な産業になることは間違いないだろう。(おわり)